# 平等と公平について考える

生活支援主任　後藤　千恵

突然ですが平等と公平の違いについて皆さんはご存知ですか？

私は恥ずかしながら、「大体同じ意味でしょ。」ぐらいに思っていました。しかし、似て非なるもの（勝手に表現させていただきますが）。『公平』とは簡単に言うと丸いケーキを4人家族で分けるとき、身体の大きいお父さん、お母さん、食べ盛りの長男、次女といった順番で総合的な判断基準で各自に応じた角度で切り分ける事。均等ではないので、皆を納得させる人がこれを切り分けなくてはなりません。そして、『平等』とは、4人家族で丸いケーキを機械的に4等分、90度ずつ切り分けることです。何も考えず、誰にでも出来る作業で、権威も裁量も必要としない機械的作業です。

さて、本題に入ります。障害者支援施設エデンの園では今年度に入り、生活、活動体制の大改革を行いました。前年度から協議を重ね、「理想」や「こうありたい」が何度もぶつかりました。そこで話し合いの鍵となった言葉が「平等」でした。

措置時代はいわゆる「平等」の時代でした。それから支援費制度、現在の障害者総合支援法へと移行し、「公平」の時代へと変遷を遂げていきます。

制度は変遷を遂げていったと述べましたが、エデンの園での実際は、「平等」に囚われすぎてしまい、「平等」を目指したが故に不平等が生じるという不均衡の状態が常態化してしまっていました。

しかし、施設内での高齢化、重度化が進み、医療的な配慮が必要な利用者が増え、年齢、障害、健康が多様化している中、改めて利用者のニーズに応じた支援（介護）や環境を見直す必要が急務でした。つまり、支援の在り方に「平等」を続ける事が困難であり矛盾が生じていたのです。そして、協議の中で出た答えが、『原点に立ち返り、個人の夢やこうありたい自分へ繋げる為に我々は当たり前の生活実現を目指す為の、生活活動体制構築』でした。

先ずは大きく2グループに分け、一つは看取りを視野に入れた高齢者支援と、ADLの向上、機能維持、健康維持、生き甲斐を目標にした『フローラ班』、もう一つが地域生活を意識したADLの向上、生きがいのある生活を目標にした『ちゅら班』が編成されました。

昨年度の2月より施行的に活動を開始しましたが、当初はやはり職員、利用者共に新たな環境に戸惑いを隠せず、どのような動きをしてよいのか模索する日々が続いていました。しかし、そのような中、若い職員が、利用者の声を聴き、ニーズを汲み取り、「こうすれば良いのでは？」「こんな活動をしていきたい」と積極的に話し合いを持つ姿も見られるようになり、それは嬉しい戸惑いと捉え、皆で一致団結して乗り越えていこうという姿勢がうかがえる場面もありました。

準備期間を含め約5か月が経過した現在、フローラ班は、一人ひとりに寄り添えるよう、それぞれのペースに合わせた生活リズムにおける個別ケアを構築中です。ちゅら班は、一人ひとりの可能性に応じた活動内容の選択と提供を行いながら、体験、経験の場を増やしていく事を模索中です。

まだまだ「平等」の考えから抜け切れず、画一的で決められたレールを作ろうとしてしまいますが、それぞれのライフステージに合わせた当たり前の生活を送ることが出来るよう、職員同士たまにはちょっと厳しく意見をぶつけ合いながら、新たな時代のエデンの園へと生まれ変わることが出来たらと思います。

# イースター礼拝・召天者記念会

生活支援チーフ　光森　勇人

4月15日、例年通りイースター・召天者記念会が催されました。キリストの恵みと喜び、祝福に預かる機会という事で、利用者・家族・職員総勢200名近くが出席しました。宮崎清水町教会の原田牧師のメッセージや召天者の紹介、利用者と職員による弾き語りなどがあり、厳かに執り行われました。賛美では、召天者を偲んで作られた歌も披露され、涙を誘う場面もありました。年度初めに行われるこの会で、先人たちの思いやエデンの園の歴史を肌に感じる良い機会となりました。

# ゴールデンウィーク

生活支援課チーフ　山本　和寛

5月4日、ゴールデンウィークの真っただ中に『井上ファミリーバンド』が来園され、コンサートを行って頂きました。エデンの園では毎年のように井上ファミリーバンド方々が来園され演奏してくださるので、利用者の方も今回のコンサートを楽しみにされていました。演奏が始まると自然と笑顔がこぼれ、手拍子や合いの手をいれる利用者の方もいらっしゃいました。知っている曲では、利用者の方も一緒に歌って喜ばれていました。コンサート後には、ラベンダーの香りの入浴剤を使用し、入浴を行いました。気持ちよかったー、と言う声も聞かれ喜ばれていました。昭和を代表する名曲と美しい音色、聞き入る歌声、ほのかに香る優しい匂いに心身癒され、楽しいゴールデンウィークになりました。

# スポーツレクリエーション

生活支援課　緒方　敬士

5月31日にスポーツレクリエーションが行われました。競技では、「走る」「踊る」「運ぶ」「投げる」が主で、利用者・職員共々、協力しあいながら、会場は大変盛り上がりました。利用者の方も汗を輝かせ、感動と達成感に包まれた、貴重な経験が出来たと思います。また、日頃、運動に親しんでいない人たちも、スポーツを楽しめる機会にも繋がり、大きな行事を成功させることにもなりました。

利用者が「楽しい」と感じる「場」を準備することにより、年齢、体力に応じて楽しく参加できたのではないかと思います。限られた時間と空間でしたが係りが工夫しあい、競技できたこと、利用者が笑顔で受け止めてくれたことが、何よりも大きな喜びになりました。行事担当者として皆さんの意見を聴きながら進めていけた事が、忘れられない記憶として残っています。来年も、利用者が楽しいと思えるスポーツレクリエーションにしていきたいと思います。